水牛通信　毎月1回10日発行　1981年10月10日発行　通巻28号　1980年5月23日第三種郵便物認可

水牛通信

VOL.3 NO.10
毎月1回・10日発行
定価200円

人はたがやす　水牛はたがやす　稲は音もなく育つ

メッセージ　チリ人民連帯アメリカ大陸事務局
コザの向うにミクロネシアが見える　3
鰻踊り図解　柳生弦一郎　8
楽譜
戦さのはげしかったころ　10
ハワイ・アロハ　11
フジムラ・ストア　12
ベラウ共和国国歌　13
ベラウ・オキナワ・ミナマタアピール　14
太平洋地図　16
水牛楽団のページ　18
まつりと海と　国吉　保　19
パラオ人が日本におくる歌
アルフォンソ・ケベコール　井上澄夫　23
ハワイは自家製の歌ざかり　室　謙二　29

チリ人民連帯アメリカ大陸事務局からのメッセージ

「サンチャゴに歌が降る」のために

コンサートにお集まりの親愛なる日本の友人たちへ。

みなさんがチリ人民を助けるために、おやりになっていることすべてを、私たちはよく知っております。チリ人民は、厳しい弾圧と自由の欠如とにもかかわらず、ピノチェットが押しつけている体制に対して、大胆な闘いを行なっております。日本のもっとも民主的でチリの事情に明るい人びとが、生き続け、パンを手に入れるために、自由を回復するために努力している国内のチリ人民とともにあることを、私たちは知っていますし、またさらに、みなさんが世界四十カ国に散らばっている百万ものチリ亡命者たちの味方であることも知っています。彼らに対して、ファシスト政権は自らの祖国で生きる権利を拒否しているのです。

ピノチェット将軍の日本への旅行予定については、これまでいろいろと語られてきました。また、みなさんの国の民主的な人々が、この、かくもドス黒い歴史を持った人間、かくも徹底して残虐な独裁者を客として迎えるのに反対していることを私たちは知っており、大いなる関心を寄せてもいます。ピノチェットは、帝国主義と多国籍企業の支持を得て、サルバドール・アジェンデ大統領の民主的政権を打ち倒し、チリをファシズムの暗闇へと沈めこんだ軍人なのです。独裁者ピノチェットの日本訪問を拒否する人々に、私たちのあらゆる勇気と共感とを送ります。

私たち在メキシコのカサ・デ・チーレは、チリ人民の精神的価値を保ち続け、科学的研究や文学的、芸術的創造を促し続けることを使命としています。私たちはまず第一に、みなさんがほんとうのチリ――ピノチェットのチリではなく――ほんとうのチリに寄せられている友情に感謝を送ります。そして第二に、私たちにとって名誉であるだけでなく、私たちの闘いを力強く支援もしてくれるみなさんの連帯に、激励のことばを送ります。

ルイス・エンリーケ・デウラル（カサ・デ・チーレ代表）

一九八一年八月十二日　メキシコシティー

水牛ミュージック・コンサート④

コザの向うにミクロネシアが見える

11月4日(水)午後7時開演　川崎市立産業文化会館

島は小さい。大陸とちがって、ひとつの海辺から海を背にして歩きだせば、すぐにもうひとつの海辺にたどりつく。

大陸は海にぶつかったところでおわる。だが島にすむ人びとにとって、海はまだおわりではない。海はもうひとつの陸、かれらを別の島の住人たちにむすびつける水の道なのだ。かんたんなくり舟をあやつって、漁や交易をおこなう人びとのために、沖縄には「ウミアッチャー」――海を歩く人ということばがある。海がひとつの生活をべつの生活につないで、島づたいにひろがる世界がある。

やくざの縄ばりのことをシマという。島には閉じた集落という意味もある。島は海によって閉ざされている。しかし海は国境ではない。島を閉じこめるだけではなく、島にもっと大きな世界のひろがりをあたえる。

仏教や儒教やキリスト教やヒンズー教が大陸からやってくるまえに、島にはそれとはべつの文明があった。それぞれの島がそれぞれに独自の生活をいとなみながら、侵略や支配によってではなく、べつの島々の生活と海によってむすびつき、共存していく。島の文明は平和の文明なのである。

加藤登紀子「土に帰る」

土に生まれて
土に帰る
人のいのちの
ほんのみじかい
この世の旅路
長い歴史のなかで
生きたひとりひとり
今は白い
砂のように
海にいだかれて
流れるままに
あふれるままに

終りのない旅路を
きいてごらん
海なりの音を
とどかぬ叫びのように
死んだ人の
のこした　祈りのひびきを
たったひとりで
生きていても
ひとりきりじゃない
人はみな　それぞれに
大地のひとかけら
風にさらされ
波に打たれて
終りのない旅路を

林光「てィーち－てィーる・じんじん」

「てィーち－てィーち」は、かぞえ唄のこと。「じんじん」は「ほたる来い」の唄――沖縄のふたつのわらべ唄をくっつけた林光のピアノ曲である。

沖縄民謡「谷茶前」（たんちゃめ）

恩納村・谷茶の白浜。
この浜にスルル小（キビナゴ）がよせてきた。いや、スルル小ではない、大和ミジュン（イワシ）だぞ、あれは。
女たちがイワシを売りさばく。売りおえた女たちから、なまぐさい匂いがたちのぼる。なんていい匂いなのだろう。
十八世紀のなかばごろ、尚敬王が島中を巡視してまわったとき、谷茶の人びとがこの唄をつくって迎えたといわれる。男はカイ、女はザルをもって踊る。海の生活のなかから生まれた、もっとも代表的な沖縄民謡だ。
川崎沖縄民俗芸能研究会は、川崎市在住のウチナンチューたちのグループ。

同「鳩間節」

八重山の鳩間島で生まれた。小さな島の自然と平和な生活をたたえる。

喜納昌吉「東崎」（あがりざち）

（訳詞）
与那国に渡り
東崎に立ってみれば
波の花がすばらしく美しい
情深い
島の人たちの心のように
我を忘れ
時を忘れ
立ちつくしてしまう
東崎からながめる景色
昔の沖縄を思いだす
いまでは変りはててしまった
生り島ウチナー
海よ山よ
人の心を変わらせてはくれるな
いつまでも　いつまでも
この東崎のように
東崎のあの自然を見れば
人の道　運命がそこにある
御万人に知らせたい
このすばらしさを
鳥も花も蝶も
共に語り
暮らしたい
いつまでも　いつまでも
心にしみて忘れない

「夜這いの曲」

ソロモン群島のなかの最大の島――マライタ島。この細長い島の南部にすむアレアレ族につたわる曲。
ここではすべての楽器が竹でできているので、竹のことも楽器のことも、おなじ「アウ」ということばでよぶ。パン・パイプの合奏にはいろいろなスタイルがあるが、「アウ・タハナ」といって、四人で頭をつきあわせて演奏するかたちのものが、もっともポピュラーである。
レパートリーは一七四曲ある。それを十一曲ずつくみあわせて演奏する。パン・パイプの音階は一オクターブを七つに等分した七平均率で、東南アジア一帯にひろがる非常に古いもの。竹はフィリピンからメラネシア一帯では、新石器時代以前からつかわれていた。したがって竹で演奏する音楽が、この地域ではもっとも古い。
「夜這いの曲」の原題は「アーノ・アーノハ」といい、前記の十一曲からなる組曲のひとつである。
ある夜、ひとりの男が家に這いこんでいった。ところが、たてかけてあった大きな竹筒（水をためておくための）に頭をぶつけて、竹がたおれ、家の人たちがみな眼をさましてしまった。その住人のひとりが音楽家で、このできごとを記念して曲をつくった。それが「アーノ・アーノハ」。

「しずくの曲」

おなじくアレアレ族のもので、雨だれが家の屋根から地面の葉っぱに、ポトポトとおちるところをえがいた。
どれも三十秒ぐらいの短かい曲で、二回くりかえして演奏する。どの曲にも物語がついているけれども、音楽家が知っているだけで、シロウトの聴衆にはおしえない。今回は例外である。

ケベコール「ベトナム・タヨリ」

パラオの音楽にはまったく楽器がなかった。あらゆる場合にそなえて長短のチャント（呪文）があり、そこに歴史や日常生活のなかのさまざまなきまりがこめられている。とくに古代の航海術は歌でおこなった。いまも二年に一度、ハワイからタヒチへカヌーでわたる人たちが、この歌のおしえにしたがって航海をつづけるという。
アルフォンソ・ケベコールおじさんの歌を三曲。これはベトナム戦争にいった甥が、故郷の恋人におくった手紙をもとにしたもの。

はるか遠く　いまはアジア
広い山奥に敵の空
今日も　山のふもとで
夜をすごせば　故郷を思いだす

今日も朝から　またタコツボ
ハノイの海
サイゴンの山や丘をながめると
故郷の山を思いだす

つぎの日も　ハノイで日が暮れると
いつも遊ぶ場所を思いだす
忘れえぬ　あのマラカル
あこがれは　遠きベトナムにて

よいやみせまれば　東からでる月
月をみれば

岩山の七つの砂浜と内海
あの岩影　静かな海よ

あこがれは　パラオにてりだす月夜に
みんながペリリュー・クラブに集まって
楽しく夜があけるまで遊んで
あこがれは遠くベトナムから

同「戦さのはげしかったころ」

ケベコールさんをはじめとするベラウ共和国（パラオ）の人びとは、第二次世界大戦中、日本軍のたたかいにまきこまれた。三十数年をへだてて、ベラウの人びとがであった日本人は、自国の核廃棄物を南太平洋にすてようと金をふりまく傲慢な連中だった。ケベコールさんは忘れかけていた日本語を思いだして、日本人によびかける歌をつくった。

同「トライデント・サブマリン」

アメリカはベラウの土地の三〇%を軍用地にし、さらにトライデント・ミサイルをつんだ原潜の基地にしようとしている。

トライデンサブマリント核ワドコニオクノカ、ダレガパラオニモチコムト言ウノカ、コンナモノワキライカラ　モッテカエレ、ワレラノパラオワヘイワデ　スバラシイクニダ、ジブンノテキモイナイカラ　核ナンカイラナイ！

ワレワレワヒトノテキデモナイカラ死ヲマネク核ナンカイラナイ、トライデンサブマリント核ワパラオノ憲法ニ反スルカラ、モチコミワコトワル、コレラヲアメリカニモッテカエレ

核ヲモトメナイ、トライデンサブマリンモノゾミワナイ、コンナモノワ　アナタジシンガ意ノママニツクッタモノ、ワレワレニマッタクヨウナイカラ　アメリカニモッテカエレ

ことしの六月、ベラウの三人の女性が日本にまねかれ、沖縄と水俣で、おおぜいの人びとに会っていった。この歌は、彼女たちが沖縄にやってきた一週間まえにつくられ、旅のあいだ、各地のあつまりでうたわれた。

六月二十三日の那覇集会では、つぎの一節をふくむ「ベラウ・オキナワ・ミナマタ・アピール」が発表されている。

「ベラウ、オキナワ、アマミ、ミナマタ、それはすでに単なる島ではない。分断と孤立を排し、島々の歴史と風土に依拠し、太平洋を一つの共同体として、そこに生きるすべての人民の明日をさし示す喚び声が発する島である。

ベラウ、オキナワ、アマミ、ミナマタ……それをつなぐのは海である。人びとは海で出会い交流し、島と島を結びつけてきた。

いま、その海が島々の海から太平洋にひろがる太平洋人民の海が、奪われようとしている。米国の核基地と、日本の原子力産業による核廃棄物の投棄で、太平洋が死滅させられようとしている」。

加藤登紀子「ノーノーノー」

原子力発電と自然破壊に反対して、もっと自然をとよびかける歌。

同「フリーダム」

フリーダム！　かぎりない自由のなかへ
フリーダム！　終りなき旅にむかって

ビルの窓から　見える空も
木々をゆらして　吹く風も
おいらの心を呼んでる
見えない壁を　つきやぶれば
自由の世界が　すぐそこに
おいらの心を呼んでる

（リフレイン）

はだしで歩いた　いなか道
やけつく日ざしが　おそう時
おいらの心は走りだす
見えない鎖に　つながれて
しらずしらずに　さびついた
心の扉をあけてくれ

（リフレイン）

見えない壁を　つきやぶれば
自由の世界が　すぐそこに
おいらがゆくのを待ってる
厚い上衣を　ぬぎすてて
あの子を腕に　だきしめて
今すぐおいらはかけてゆく

（リフレイン）

「ハワイ・アロハ」

ハワイでも一九七〇年代にはいると、南太平洋の島に生きるもの同士という意識がつよくなってきた。沖縄からソロモン群島、パラオへとつづいてきた「ウミアッチャー」たちの航海は、ハワイにたどりつく。ジャンボ・ジェットによってではなく、島から島へ、くり舟でわたる歌の旅だ。

この歌は非核太平洋会議のなかでうたわれるようになった。南太平洋のいたるところでうたわれ、したしまれている。

「フジムラ・ストア」

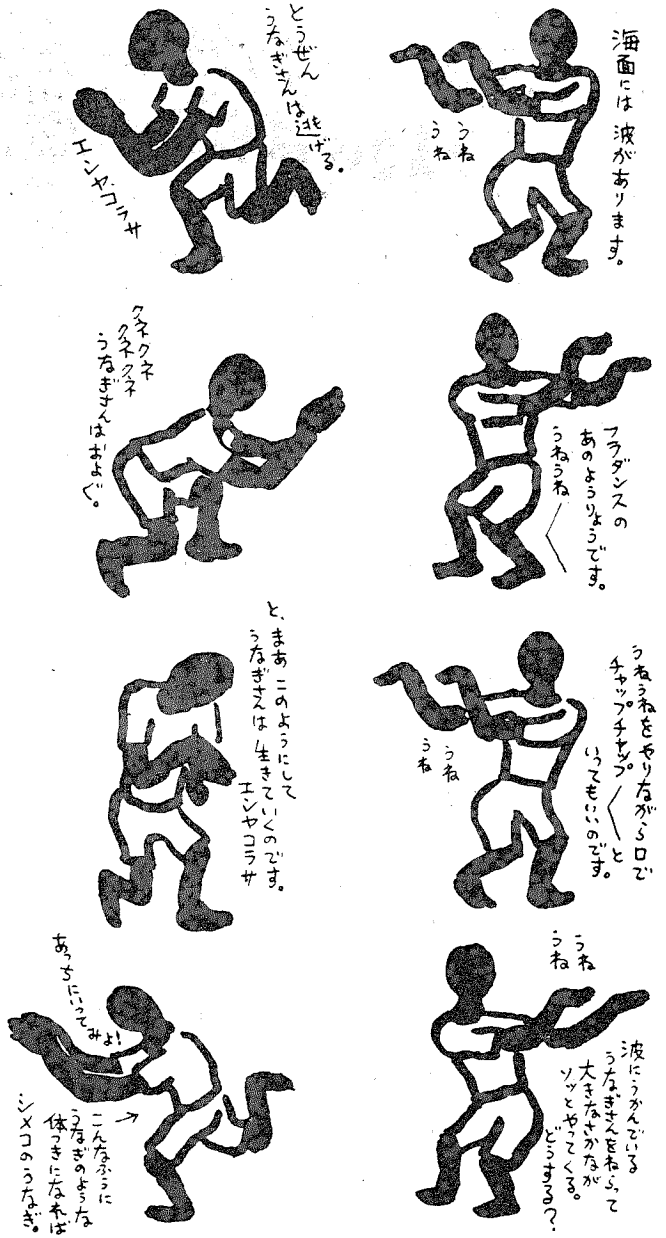
チップ・ヘイトルリッドとシェイヴ・アイス（かき氷）の曲。一九七〇年代後半にさかんになった「ホーム・グロウン」（自家製）の歌の運動から生まれた、代表的なもののひとつである。

日系人のフジムラさんがつくった小さな雑貨屋が、スーパー・ストアによってつぶされてしまう。古い店とそれにむすびついた生活の記憶が失なわれ、画一的な文化がおしよせてくる。

鰻(うなぎ)踊り(の踊りかた)図解

と、いうような たいそうなものではなくて、まあ だいたい こんなふうなものである、というところを絵ときしたもので、柏子は 千柏子(もどき)で イチ ニイサン シ イチ ニイサン シと踊るワケであります。

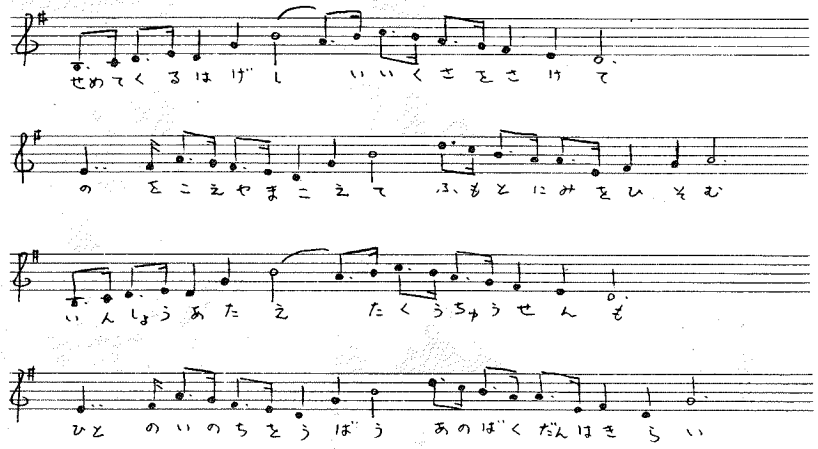
水牛ミュージック・コンサート④の「ゴザの向うにミクロネシアが見える」のフィナーレをかざるハズの「鰻踊り」を水牛通信社のマイクロコンピュータを使って図解したものである。



と、まあ このような4つのうごきを その人その人のこのみでつないでいくわけであって、波のうねうねのすきな人というか、うねうねがじまんという人は そればっかりやっていればいいし、うなぎ そろそろ入りこむ黒いアシワラかきわけて エンヤコラサ、のすきな人は エンヤコラサ を中心にやればいいのですネ。

●なお、この鰻踊りの秘伝を 教えてくれた地球の友の 鈴木さんの話によりますと、パラオの子供たちは この鰻踊りを小学校の踊りの時間にならうということでして、なんとまあ エエことではありませんか。

戦さのはげしかったころ



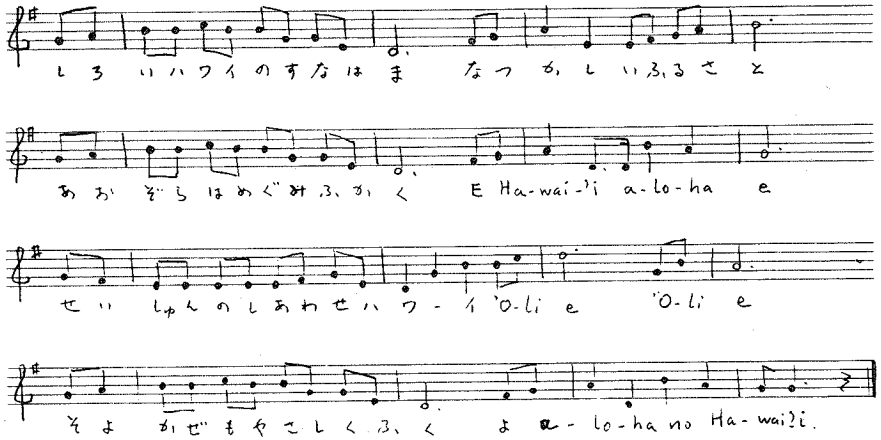
1、攻めてくる激しい戦さをさけて
野をこえ山こえて　ふもとに身をひそむ
印象をあたえた空中戦も
人の命を奪う　あの爆弾はきらい

2、戦後はあわずに　はなればなれと
はるかに遠い国　北の海のむこうに
年月は流れ　便りもなしに
いかにおすごしかと　あこがれわが胸に

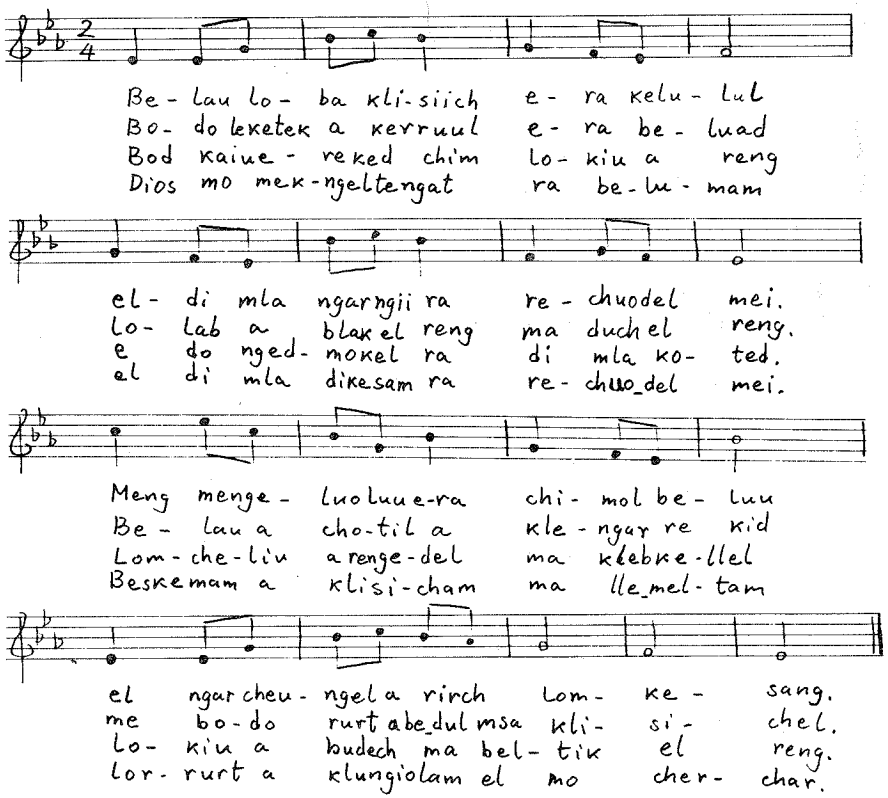
3、いつまた会えるか夢見て祈る
願いはかなえられ　今　楽しくつどう
喜びあふれる　日ざしのもとに
感激して　ともに昔をよみがえす

4、今こそ肩をならべ手をくんで
強く団結して　希望を守りぬく
足なみそろえて進歩的に
協力していこうよ　行こうよとこしえに

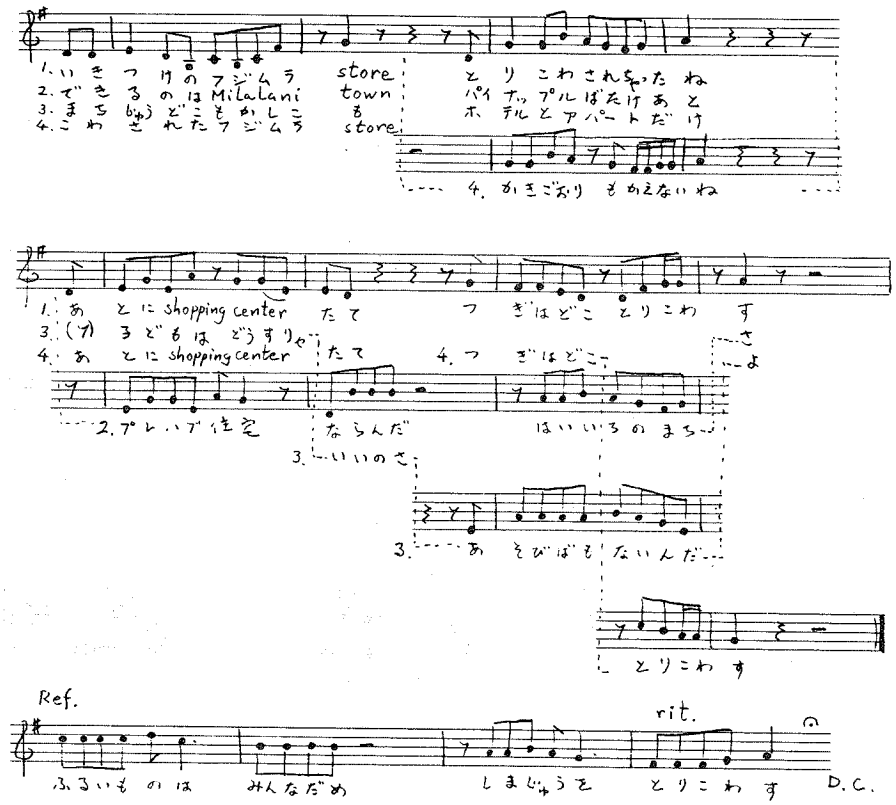
ハワイ・アロハ



ベラウ共和国国歌



ブジムラ・ストア



ベラウ・オキナワ・ミナマタ・アピール

ベラウ……それは島。かつて高度に発達した航海術で太平洋を往来し、壮大な海洋文化を形成した海洋民族の島である。だが、ベラウ、それは西欧諸国と日本帝国主義の侵入により、隷属を強要され、抑圧と搾取に苦しみ、さらに今日、ベラウはアメリカの核軍事基地が展開されようとする島であり、新しい植民地主義による収奪と破壊の脅威に直面している島である。

しかし、いまベラウはめざめの島である。自らを太平洋人民と認識し、島の固有の風土と文化に目覚め、非核憲法をかかげ太平洋を非核地帯にしようと世界に呼びかける新しい共和国である。

オキナワ・アマミ（琉球孤）……それも島である。かつて海洋民族の一員として、太平洋の諸民族と壮大な交流を果し、独自の文化を築いた島嶼民の島である。だがこの島も、たびかさなる侵入で隷属と収奪を強要され、帝国主義戦争と米軍基地建設で破壊され、今日なお、米軍の核基地、日本の軍事・CTS基地、核再処理工場計画としてひどい重苦を強いられた島である。

ミナマタ……それも島を抱えこんでいる。日本帝国主義の底辺で苦しみ、戦後日本の産業優先の政策で痛々しく傷つき病んでいる。ミナマタ、それは日本重工業の害毒により心身が蝕まれる日々にあって、人間と海の復権を痛切に呼びかけている。

ところで、ベラウ、オキナワ、アマミ、ミナマタ、それはすでに単なる島ではない。分断と孤立を排し、島々の歴史と風土に依拠し、太平洋を一つの共同体として、そこに生きるすべての人民の明日をさし示す喚び声が発する島である。

ベラウ・オキナワ・アマミ、ミナマタ……それをつなぐのは、海である。人びとは海で出会い交流し、島と島を結びつけてきた。

いま、その海が、島々の海から太平洋にひろがる太平洋人民の海が、奪われようとしている。米国の核基地と、日本の原子力産業による核廃棄物の投棄で、太平洋が死滅されようとしている。

この海の喪失、太平洋人民のいのちとくらしが奪われようとしている今日、ベラウ、オキナワ、アマミ、ミナマタは、ここに歴史的な結集を実現した。

そして、ベラウ、オキナワ、アマミ、ミナマタは、その歴史的苦痛をかみしめつつ、全世界に向って、次のことを要求し、決意する。

一つ。ラテン・アメリカ、南極、インド洋、東南アジア諸国と接する南太平洋全域、ミクロネシア、フィリピン、日本およびハワイの全海域を、非核太平洋地帯にすること。

一つ。この非核太平洋地帯から、アメリカはただちにすべての核兵器を撤去すること。

一つ。米国は、日本における非核三原則に基づき、沖縄をはじめ日本のすべての基地から核兵器を撤去し、一切の軍事基地をとりのぞくこと。

一つ。米国は、ベラウ共和国に核基地を強要する「自由連合」の策動をただちに停止し、ベラウ人民による非核憲法の判定、ベラウ共和国の建設に対する干渉をただちにやめること。

一つ。日本政府は、ベラウ共和国の提唱している非核太平洋地帯をただちに承認し、ベラウ共和国の海域はもちろんのこと、太平洋のいかなる海域にも日本国の核廃棄物を投棄しないこと。

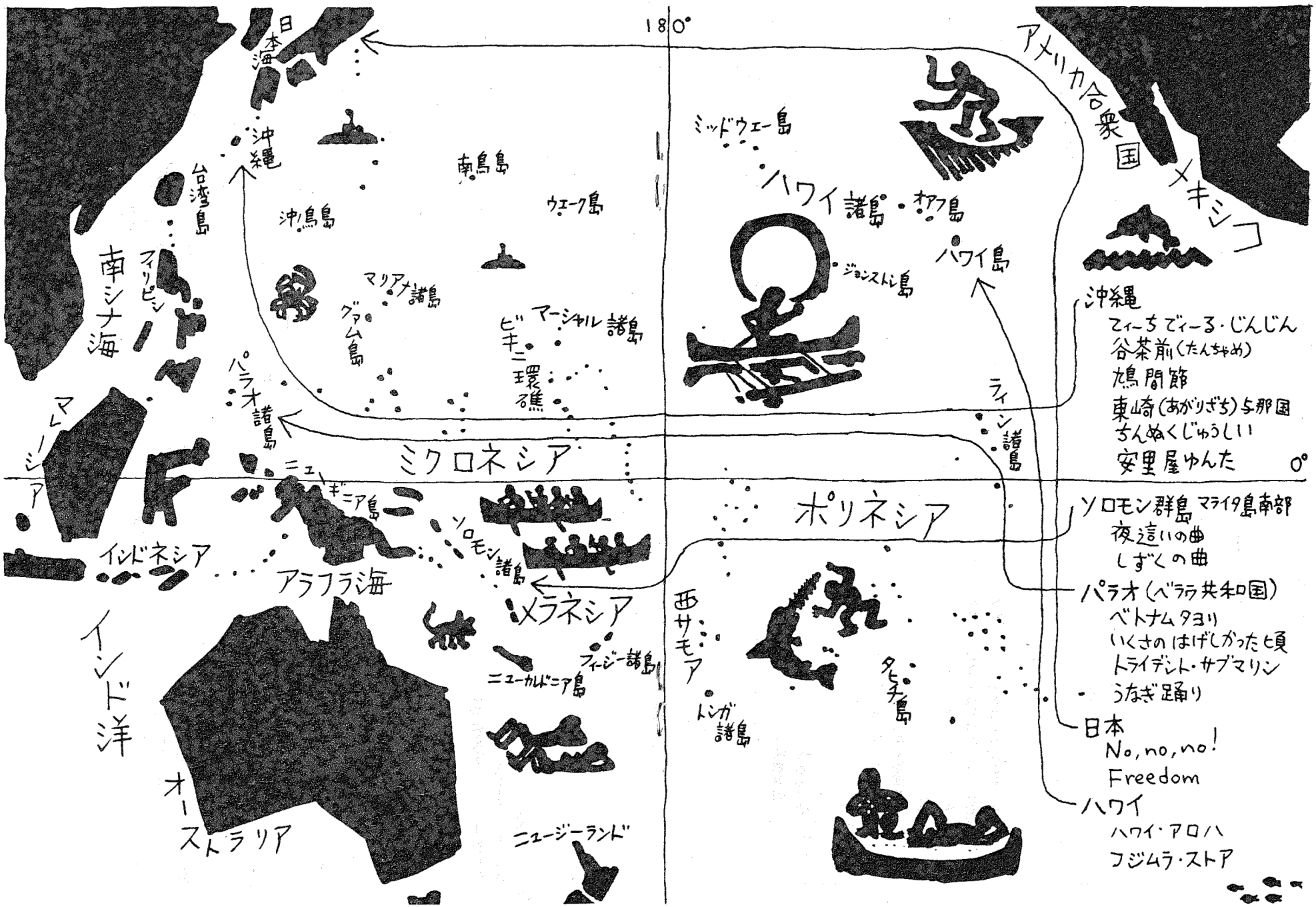
一つ。日本政府は、沖縄の金武湾、奄美大島の枝手久CTS、徳の島、西表島への核燃料再処理工場の計画、ベラウCTSの設置計画、その増・拡張工事・計画をただちにとりやめ、海の再生をはかること。

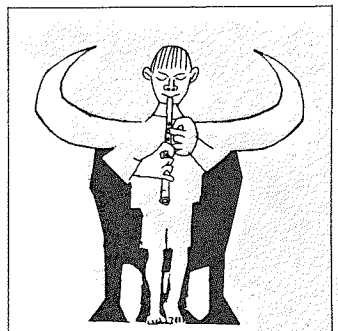
一つ。ベラウ、オキナワ、アマミ、ミナマタと、思いを同じくするすべての太平洋人民は、太平洋人民の永代にわたる生存権にかけて、この要求実現のたたかいに参加すること。

右宣言する。

一九六一・六・二十三

ベラウ婦人をかこむ那覇集会参加者一同


180°
日本海
沖縄
台湾島
南シナ海
フィリピン
マレーシア
インドネシア
アラフラ海
インド洋
オーストラリア
沖鳥島
南鳥島
ウェーク島
マリアナ諸島
グアム島
マーシャル諸島
ビキニ環礁
パラオ諸島
ニューギニア島
ソロモン諸島
ミクロネシア
メラネシア
フィジー諸島
ニューカレドニア島
ニュージーランド
ミッドウェー島
ハワイ諸島・オアフ島
ハワイ島
ジョンストン島
アメリカ合衆国
メキシコ
ライン諸島
ポリネシア
西サモア
トンガ諸島
タヒチ島
0°
沖縄
てぃーちでぃーる・じんじん
谷茶前(たんちゃめ)
鳩間節
東崎(あがりざち)与那国
ちんぬくじゅうしい
安里屋ゆんた
ソロモン群島 マライタ島南部
夜這いの曲
しずくの曲
パラオ(ベラウ共和国)
ベトナムタヨリ
いくさのはげしかった頃
トライデント・サブマリン
うなぎ踊り
日本
No, no, no!
Freedom
ハワイ
ハワイ・アロハ
フジムラ・ストア



水牛楽団のページ

活動記録

八月十三日（木）　**山谷夏まつり**　玉姫公園テニスコート　夕方

「人と水牛」や「雨をまつイネ」、「不屈の民」、李政美がきてくれて「再会」や「時がくれば」など。それに「兄弟仁義」や「山谷ブルース」。演歌はみんながすきだったようだが、うまくやるのはむずかしい。

八月二十七日（木）　**水牛ミュージック・コンサート「サンチャゴに歌がふる」**

夏で、前売り券もあまり売れなかったから、五百人位の客席を見ておどろく。

「バナナ食民地」以来の大作「イキーケのサンタ・マリア」（演奏時間35分）のために、いつもより練習回数もおおかった。

メキシコのカサ・デ・チレーからのメッセージがとどいた（今月号に掲載）。

いつもくふうをこらす林光コーナーでは、新曲「日本を訪問するチリ大統領への日本国総理大臣の歓迎の辞」の初演があり、諷刺のきいたテキスト（林光）や「君が代」の引用で、客席をわかせた。

九月十五日（火）　昼　中野サンプラザ前の広場で**「くさのねコンサート」**

白竜バンド、紅竜とひまわりシスターズ、ホンヨンウンたちとならんで、李政美十水牛楽団。「時がくれば」、「再会」、「白いハト」、「ありがとういのち」など30分。

ほかのバンドはみんな場数を踏んでうまくなっている。水牛楽団はどうだろう？

野外はいつも気分がいい。

予定

十月五日から十五日までタイ旅行。演奏も何回か。くわしくは12月号を見てください。

十月三十一日（土）　関西学院大学　オールナイト・コンサート

十一月二日（月）　国立音大学園祭　2時半

十一月四日（水）　水牛ミュージック・コンサート第4回**「コザの向うにミクロネシアが見える」**　川崎産業文化会館　7時

ゲスト　加藤登紀子　川崎沖縄民俗芸能研究会　前売一五〇〇円　当日一八〇〇円

いつもの中野文化センターをはなれて、川崎の二千席の大ホールなので、どうなることか。プログラムはこの号にある通り。いつもの楽器のほかに、竹を切ってパンパイプやほかの楽器をつくったり、もちかえで加藤登紀子さんの伴奏バンドにもなる。

十一月二十八日（土）　神奈川大学　オールナイト・コンサート

活動記録にかきおとしたが、福田克彦さんの8ミリ映画「三里塚ノート3　土の行進」の音楽も、アンクルンやトンガトンのような、東南アジアの竹楽器をつかって演奏した。歌だけでなく、こういう楽器の音楽をもっとつくっていきたい。

まつりと海と—「おもろ」から金武湾ハーリーまで

国吉　保

夏になり、里がえりの時期がやってくる。友だちと話をしているときまって沖縄のことが話題にのぼる。暑い沖縄は観光産業の宣伝文句でもあり、なんだか常識のようだ。しかし考えてみると、よわい陽ざしのわりにはネバつくような暑さのつづく東京の夏とちがって、むこうの夏は照りつける太陽はつよいけれども、どこかいつも風が吹いている。だから、すずしいとまではいかなくとも、東京よりはずっとしのぎやすい気がする。

さて沖縄は「うた」だけではなく、「まつり」の島でもある。そしてこのまつりも、浮かれてみんなで大騒ぎするたぐいのものだけではなく、神行事的な色彩が濃くのこっているのがおおい。どこへ行ってもだいたい部落（集落のことをふつうそうよぶ）ごとに自分たちの行事をもっているから、人の住んでいる島全部を見わたすと、一年じゅうまつりをやっているといってもいいだろう。

夏がちかづいてくると、まつりも海へひろがっていく。

旧暦の五月四日には、各地でハーリー競漕が盛大におこなわれる。これは爬竜船と書かれ、二十人から四十人くらいの漕ぎ手の乗った船がにぎやかに競い合うまつりだ。大きくて有名なのは本島南部の糸満（いとまん）のもので、土地のことばではハーレーといっている。なお「標準語」読みをしてしまうと、ハーリーの「ハ」にアクセントがついて鍬や針をのばしたように読まれがちだが、ふつうは「ハ」と「リ」にアクセントの差はあまりない。

本島の中部にはエイサーという集団の踊りがある。「エイサー大会」や「エイサー・コンクール」も開催されるほどはやっていて、その大部分が型にはまりつつあるのだが、古くはニンブチャーウドゥイ（念仏踊り）の流れをくんでいるようで、旧盆のウークイ（精霊送り）がおわると部落内にくりだし、家ごとをまわって歩くいさましい若者たちの踊りである。エイサーの呼び名は、念仏うたのハヤシからきているとされている。また一説によると琉球の万葉集などといわれる「おもろさうし」中の十四の巻いろいろのゑさおもろさ

うしの「ゑさ」とも関係があるようだ。おもろは現在では言葉だけのこっているが、その昔はふしと踊りがついていたらしい。

エイサーとはあまり関連しないけれど、このゑさおもろさうしのなかに、次のような、おもろにはめずらしい恋うたもある。

かつれん　まみにやこ　は　やておちへ
中ひやくな　こみなこ　は　やておちへ
ひるなれば　きもかよい　かよて
よるなれば　いめかよい　かよて
にしみちの　ぢやなみち　が　いきやし
ゆ
ひがみち　の　やぎみち　が　いきやし
ゆ
ひがみち　や　やぎ　の　おもい　ぎや
まちより
にしみち　や　ぢやな　の　おもい　ぎ
や　まち　より
いぢや　やけな中みち　ぢよ　いきや
しよ

勝連真蜻子を見てしより／中百名小蜻子知りてより／昼は心の通ひに通ひ／夜は夢路を辿りに辿り／西道の謝名道を行かばや／東道の屋宜道を行かばや／東道には屋宜の恋人まてり／西道には謝名の恋人まてり／いでや屋慶名中道をこそ行かめ（伊波普猷訳）

勝連は現在エイサーのさかんなまちのひとつである。このうたは、勝連にいる恋人のところへ行きたいのだが途中の路には東にも西にも恋人がいる、みつけられては大変だから真中の屋慶名道を通っていこう、という意味だ。

ウンジャミは本島北部や伊平屋島に何百年もむかしから伝わる海のまつりである。ウンガミ、あるいは漢字では海神祭ともかく。都会から遠くはなれた土地のまつりだけに、素朴で神秘的な面がたくさんある。なかでも塩屋というところでは、湾内に点在する部落が共同で祭祀をおこない、祈りの儀式のあとに御願バーリーとよばれるハーリー競漕をやる独特な形が伝えられてきている。

海の平和、豊穣を願って神アサギ（壁のない屋根と柱だけの小さな建物で祈りの場所）で、芭蕉布の神衣裳を着たおばあさんたちがオモイ（神歌）をうたう。

にれーから
あまちゃに
しらちゃに
うしんとりぬ
くくりもーち
あぶしかた
まきちらち
みるく世も
ふいみちら

ニレーから／甘種を／白種を／鷲の鳥が／ふくんで参って／畦形に／まきちらして／弥勒世（豊年）も／降り満たそう（塩屋海神祭のオモイより）

ニレーはニライ・カナイのことで、古代から琉球人が祈りの対象にした海の彼方にある理想郷である。

御願バーリーは塩屋へ向けて出発する。塩屋の岸は各部落のひとびとでいっぱいだ。婦人たちは藁鉢巻をしめ、藁帯姿で海につかり、うたをうたい太鼓を叩き、手ぬぐいを打ち振ってハーリー船を迎える。様式化されないこんなまつりもまだあちこちにのこっているのだ。

海はいつの時代にもその「母性」をなくさない。海神祭は女のまつりである。

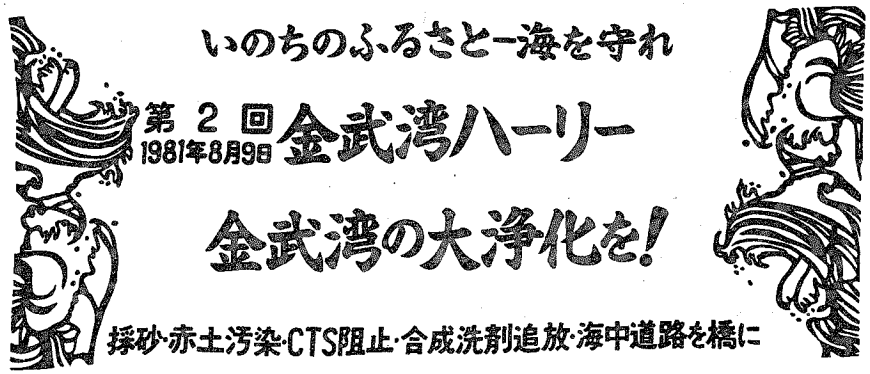
爬竜船競漕やエイサー、海神祭は、本島の

いろいろなまつりや行事の一部分にすぎない。女の海神祭にたいして、男のまつりであるシヌグ（神遊び）、あるいはエイサーに対し女だけのウスデーク（臼太鼓）、そのほか大綱引きや先島（宮古、八重山）の豊年祭など小さな島もふくめてそれぞれの土地にたくさんのまつりがある。

これらは伝統がふるいだけ願いもふるい。あたらしい願いのためのあたらしいまつりにはどんなものがあるだろうか。

金武湾の浄化をねがって金武湾ハーリーがおこなわれている。今年は二回目にあたる。祈願のためのハーリーつまり御願バーリーを中心にした伝統的なかたちをもちながらも、祈りの焦点を現代に合わせたまつり。

真夏、八月のはじめ、石油備蓄基地（CTS）と海中道路が見える与那城の照間の浜で、御願バーリーにしばいなどを含めた金武湾まつりがひらかれた。会場というより祭りの広場には、にわかづくりのステージ、パネル展示と観客のためのテント、そして爬竜船が二隻あるだけ。金武湾を守る会の青い旗が、海風にふかれてはためいている。



ハーリーがはじまった。船には漕ぎ手たちのほかに鉦を叩く者がひとり乗っていてリズムをそろえている。これははやすぎてもおそすぎてもうまくいかないだろうし、船をはやく走らせるのには一本調子でもだめだろう。浜のほうには応援のおじいさんとおばあさんがいて、ここでも鉦をならしおばあさんたちはカチャーシーを踊っている。海からきこえてくる船の鉦のリズムより応援のリズムがいつもわずかにはやい。テントの観客のほうも大騒ぎである。浜からながめていると、爬竜船はちょうど石油タンクをめざして突きすすんでいるみたいだ。

ハーリーのおわったあとはコザからきた青年たちによってエイサー踊りが演じられた。おなじ与那城の屋慶名には、エイサーの本流をなす屋慶名エイサーがあるのだが、よそからきてもらったところには、まつりを開かれたものにしていこうとする意図があったのかもしれない。御願バーリーの鉦の音、エイサーの勇ましいかけ声はニライ・カナイへとどいただろうか。

この日のもうひとつのだしものは、団結アシビ（団結あそび）と称しての踊りやしばいであった。屋慶名芸能クラブの屋慶名アンマ

ーたちが沖縄の古典舞踊などを踊る。屋慶名アンマーとは、屋慶名のかあさん、または三里塚ふうに屋慶名おっかあという感じである。ステージのそばではおじいさんが三絃を弾き、うたっている。アンプの調子がわるいのか、しょっちゅうスピーカーの音が途切れてしまう。ところが実際はマイクやスピーカをつかわない、生のかすかな音でもじゅうぶんなのだ。これがもしもコンサートの会場か何かであれば、すぐに客席が騒々しくなるだろう。もちろんこの浜べでも観客はしんと静まりかえっていたわけではない。けれどもざわめきは波の音とうまくつり合っているのである。都市のコンサート会場が静かすぎるのは、一部の人はおかしなほど真剣にステージをにらみつけているし、残りの人は居眠りをしているという具合に観客自体が分裂しているからだろう。そこに自然なざわめきが生まれるはずはない。こんな浜べの観劇みたいな場を体験すると「劇場」の閉ざされた場がどんなに病的な空間であるのかよくわかってくる。

御願バーリーを真上から照らしていた太陽も、踊りがおわるころには、モクマオウの木のむこうがわですっかりおとなしくなっている。

パネル展示のコーナーではさっきのエイサー踊りのひとたちが、廃油ボールがうちあげられ汚れた砂浜の写真をみている。たとえ同じことをうつした写真でも、新聞でみるもの、小ぎれいにつくられた雑誌でみるもの、それに現実にかかわりのある場所でみるものとではそれぞれ違ってくる。この小さなテントではパネルのほかに、あちこちの浜に打ち上げられたほんものの廃油ボールをならべてあった。横にはだれにでもわかるように「廃油ボール」の説明から世界の汚染の分布図まである。

そのうち舞台ではしばいがはじまった。三人の役者によって演じられる喜劇「人を喰った話」だ。背広姿の男がふたり、着物をきたおばさんは椅子に腰かけている。海をまもるためのたたかいに参加してつかまったおばさんが、検事のとりしらべをうけている。ヤマトからきた検事はウチナーグチ（沖縄ことば）を解せず、威圧的な態度と法律用語で一方的に話をすすめてなんとかデッチ上げようと必死になっている。活力的なおばさんと、高圧的な検事のあいだにはさまれてしまうのは沖縄の記録がかり。楽天的なおばさんは自分で次々と武勇伝を披露して検事をよろこばせたりするが、しまいには検事をやりこめてしまう。観客はそのたびに大笑いだ。

このしばいは、笑いや皮肉をふりまきながらも、現実におこりうる場面をかんがえて、とりしらべなどへの対応のしかた、予備知識を教えているのである。

日が暮れてまつりもおわりにちかづくと、ロックバンドが演奏をはじめた。お年寄もたのしそうにきいている。昼間のハーリーの賞品のアワモリによっぱらったオジサンが、ステージにとびあがり、ロックのリズムに合わせてカチャーシをおどりだすと、みんな手をたたいて大よろこびである。夜の海に歓声がひびいていった。

パラオ人が日本人におくる歌

井上澄夫
アルフォンソ・ケベコール

——いま日本政府が考えていることというのは、経済援助をしてやるから、そのかわり核廃棄物の海洋投棄という問題について、パラオの人たち、太平洋の人たちは黙っていてくれと、そういうことらしいんですよ。そういう働きかけを、島の上層の人たち——行政にたいしてやる。住民の人たちは、そうかんたんには納得しないだろうから、上のほうだけお金でなんとかしようというのが、かれらの考えだと思うんですね。

——とんでもない、あやまった考えですね。そんなことに気をとられて、お金や援助をもらうことになれば、永久にいいことはないと私は思いますからね。お金をもらう人は、かならず支配されますから、それを私、懸念しています。

——ええ、うーん。

——そういう国はすべて、自由がないといってもいいくらいでしょう。まして、われわれパラオ島の住人は、大昔から今日にいたるまで、代々、自然とともに生きてきた者ですからね、それを急速に変化させていくわけにも……ええと、なんですよ、物質や文化にめぐまれても、心は貧乏になるんじゃないかと、私は思いますね。それは、わが子には残しておけないことです。

私はね、日本政府にたいして情なく思うのは……われわれは日本時代に出身した人間だし、ともかくも三十何年間をいっしょにすごしてきたからね、おなじアジアの人間であるかぎりは、どう考えても兄弟ではないかと思いますし……。

いま私たちは日本から魚の缶詰を輸入していますが、生命の本源といえば、私たちは海と土地にたよるしかありませんですね。私たちは代々、海の食物で生活してましたし、これがそこなわれたら、それこそもう、生きてはいられないと私、思います。願わくば日本政府も、ほかの国と競合して、私たちパラオの人たちや南諸国の人びとに圧力をかけて、しいたげるようなことはしてもらいたくはないね。

パラオの議会でどう思っているかは知りませんけれど、私たちはここでグループをつくって、いままで運動してきていますからね。

私たちにとって、この問題は小さいことじゃないの。そのことを私も骨折って、みんなに納得させるつもりです。

——日本の民衆の側でも、太平洋の人たちのいいぶんはまったく正しい、そのとおりだと、そして日本政府にたいして、海洋投棄計画はやめさせようと、そういう動きはあるわけです。しかし政府は民衆のいいぶんを——われわれは太平洋の人たちとともに生きていくのだから、そういう計画はやめろという主張を、まだ認めるということではなくて、むしろ逆に、だれがなんといおうとやるんだという……

——やはり国民が日本政府に反対するというのは、それは政府もすきじゃないと思うからね。こちらもそうなるかもわかりませんけど、いまのところはまだ、はっきりと計量はできません。

——はじめ日本政府が説明にいったのは、オーストラリアとかニュージーランドとかの大きな国なんですね。

——それでおさまると思った。

——ええ。小さな国はバカにしていて、そこから文句がでるとは思っていなかった。ところが、去年の七月にはパラオの非核憲法が

←井上澄夫氏

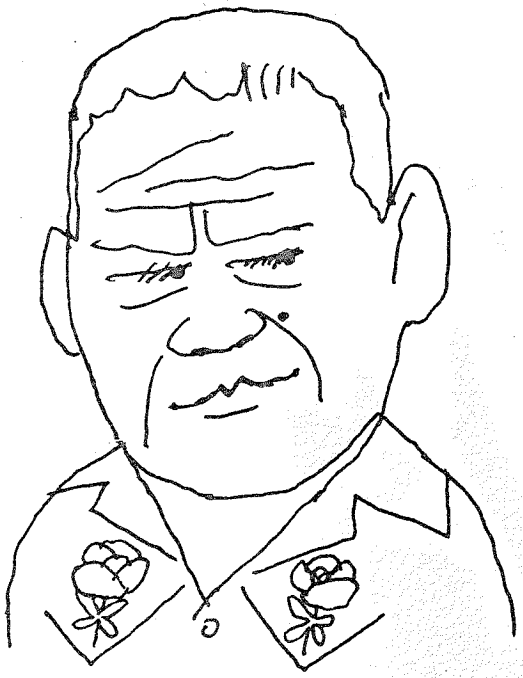
できるし、太平洋を非核地帯にしようというふつうの人たちの願いが、バーンとはねかえってきたわけですね。

それで、どうも話がややこしくなってきたと、これからの外交関係を考えると、そうかんたんにやるわけにはいかんというので、全体としてストップをかけて……日本政府としても、一時延期はやむをえないということになったんですね。計画をやめるということは問題外で、やることはやる、ただし説得をつづけるということで、ずっと実施がのびてきているわけです。

——これはですね、ええと、核廃棄物の投棄が達成されたら、日本の国は利益がえられるというわけですか。原子力発電所がないというと、日本の国は存在できないということになりますか。

——日本政府の考えはそうなんですね。それは最終的には、たんに電気がいるということではなくてですね、核兵器をつくるということですね。原子力発電所を動かすと、燃料のなかにプルトニウムができるわけですが、それをつかって核兵器をつくる。そういうことですね。

——いくら金をつくっても、寿命をのばす



アルフォンソ・ゲバコール氏→

ことはできないしね。また核兵器をつくっても……アメリカと朝鮮と戦争をしたときに、三井会社が武器を売ったという話もあるけれども、それを売って、買った国が自分の敵になってくりゃあ、金にした甲斐もないし……国は破壊され、国民は死亡するし……。

——日本のなかで運動をやってる連中も、太平洋のことを忘れておったところがあるわけですね。ところがこんどの問題で、とりわけパラオで非核憲法ができたということで、みんなびっくりしたんですね。

——日本でも平和憲法がありますよ。

——ええ、ありますけど……いまはこの憲法をかえようとする動きがあって……

——ええ、そういう報道もながれておりますよ。

——これは政府のタカ派といいますか、いちばん極端な人たちで、もういちど戦争がやれるようにしようという考え方があるんですよ。

——戦争はよくないもんですよ。私たち、第二次戦争のなかにまきこまれた人たちは、よく知ってますからね。

昔はね……日本軍は最後にはね、「天皇陛下バンザイ！」ととなえて死ぬといわれていたけれど、だれひとりとして、そんなことをとなえた者はいなかったよ。「おかーさん、井戸の水がほしい、たすけてくれー！」っていって死亡した人が、たくさんおりますよ。私、兵隊につかわれて、いっしょにやっておりましたからね。補助員に募集されて、一年間、ジャングルのなかにひそんでおりましたからね。

戦争はよくないもんですよ。私たちはいまも、十年後のパラオはどうなるか……私たちは米軍の土地使用、それから日本の核廃棄物投棄という、二つの大きな問題に直面していますからね。

私はね、友だちからジャンジャン射たれて、傷をおわされたあとはね、ふたたび兄弟にならないよ。仲よくならないよ。自分のおった傷を考えてみると、どうやったら相手とむつまじくなれるか、それは疑問ですね。

——日本はかつてこのパラオをふくめて、まア「南洋」とよんでいたわけですけど、そこを支配してましたし、そのあと戦争にまきこんで大変な被害をおわせた。その日本がふたたび海洋投棄の問題で……

——私自身としてはね、べつに日本軍がわれわれにたいして害をあたえたこと、あるいは苦しめたことなんかは、ぜんぜん気にしてないですよ。だれだって、これはもう、苦しくなってきたときにはでたらめに悪事をはたらくかもわかりませんけどね、それはそのときのことで、きのうはきのうとして、これからあらたに仲よくなって、たがいに交流して……。昔は、われわれは日本人とはべつに仲がわるかったんじゃありませんし、戦争したんじゃないんですから。

だから、昔のいい友だちの間柄をよみがえらせたいんですよ、私は。……しかし……第二次戦争の悪夢はまだ残っておりますから、そこに核廃棄物の投棄がかさなって、私たちの安住をおびやかすということになるというと……どうなるかな、それは……日々、そんなことを考えてます。

——それがこのあいだ、日本でニューンス村の代表がうたった「戦さがはげしかったころ」のなかでいいたかったことですか。

——ええ、そうです。歌できかしてやりたかったことです。まア、日本語はそれほどでないし、学はわずか三年ですから、私はうまく日本語で書くこともできませんけれど、できるだけ、私たちの齢ぐらいの人たちにはきかしたいと思ったし、また、いまの日本の若い人たちにも知ってもらいたいんだ。べつに日本人をわるく思っていないし……。

私たちはもちろん国は小さいしね、あなた方に手びきをしてもらわなきゃならない。それがそうならなければ、きわめて悲しいことじゃないですか。アメリカの人たちなんかには、実際、私はあまり興味なんかないですよ。それがあなた方に知ってもらいたいことなんですよ。

——こんどのニューンス村の人たちがうたった歌は、私たちにたいへんショックをあたえたんですね。やっぱり私たちは戦前、戦争中、パラオの人たちに非常に迷惑をかけたのに、こういう「いっしょにやろう」という歌をうたわれたわけですから、がんばって日本政府とたたかおうという気持を、みんながもちましたね。

——私自身としてはね、いちばん望ましいのは、昔をよみがえらして、これから本当にかたく手をにぎって前進することが、いちばん望ましいんですから。私たち——四十から五十、六十になるパラオ人は、日本人には未練があるといってもいいわけなんですから。だから日本は大国として、本当は兄貴として頼りにしたいわけですから、おもしろくないことがあれば、抗議しないわけにもいかないし、自分の気持をあらわさなくちゃならないんだよ。

——それからもうひとつ、東急ホテルがこのあたりにでてこようとしている、その話をちょっとうかがえませんか。

——私としては、すきじゃありません。なぜかというとね、東急ホテルがパラオの人のものだったらいいけどね。ホテルというのは私たち、なにも生産物をだして管理するところもないし、せめてパラオの人のものだったらいいと思います。

——この問題がおこったのは何年くらいまえですか。

——はじまったのは四年まえだけど、いまちょっと難航しているのね。土地の問題があって、裁判にもちこまれているから。

——このへんは昔、旧海軍の飛行隊があったということですね。

——そうです。あそこの建物——集会所がありますね。あそこのコンクリート、あれがぜんぶ水上機の格納庫だったんです。四軒ほどありましたですね。

——その一帯にホテルをたてようというわけですね。

——ええ、ここからいくらもないですよ。あれは何階といってたかな……十七階とかいってたな。こんなせまい村のなかじゃ、よくないんじゃないかと私は思います。

——東急というのは、太平洋にたいへん沢山、ホテルをつくりたがってる会社なんですよ。ほかのところでもいろいろ問題になってるんですよ。

——ええ、オーストラリアでもいま現在、問題がおきているようですね。

——コンチネンタル・ホテルも日本資本にかわったですよね。

——あれは日航ですね。

——ここで立ち退きした方は十人ぐらいときましたが……

——そういう命令はでたけどね、かれらは返答もしないで、立ち退かないで、まだいますよ。あの人たちに相談もしないで、土地が売られたということで、いま問題になっているんだ。その裁判のために、計画が足踏み状態になってます。

——そうすると、東急はここの日本軍の飛行場あとをつかって、大きなホテルをたてて、レジャー施設をつくろうということなんですかね。

——海も測量してたからね、そういう計画があると思います。観光客を山につれていく目的もあるらしい。観光客は山がすきだから……いいとこなんですから。これも私、パラオの山をそこなってはいけないと思います。

——いつごろ判決がでるらしいですか。

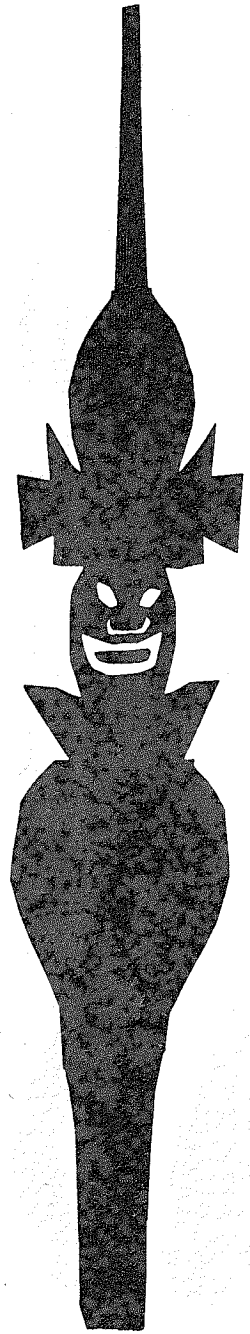
——まだまだ。

——はあ。……しかし、それでパラオの人に不利な判決がでるというと、たいへんなことになりますね。

——そのとおりです。

——海洋投棄の問題では、私たちもこれからまだがんばらなければ、たいへんなんですが……

——私もそう思ってます。歌もあれひとつではなくて、あれは日本とパラオのことをうたったものだけど、まだまだあるんですよ。みなさんに、これからも協力していこうといってください。いつでも、あなた方がおとずれることを待ってますから。



ハワイは自家製の歌ざかり

室　謙二

ハワイでは五年ほどまえから、『ホーム・グロウン』というレコードがシリーズでていて、いま五集ぐらいかな、とてもはやってるんですよ。

その背景をいうと、ハワイの一九五〇年代というのは、アメリカ本土に一体化したい、日本でいう「本土なみ」というやつね、その動きがつよかった。ところが五九年に州になって、その後、ベトナム戦争にまきこまれた。ベトナムにはハワイからも、おおぜい行ってるんですよ。このインパクトによって、「本土なみ」というのとはちがう動きがでてくるんだね。七〇年代にはいると、文化運動の一部に、自分たちはアメリカとはちがうという考え方がつよくなってきた。

それがエコロジーやサーファーの運動とむすびつく。サーファーのばあいは運動というか、気分とか生活のしかたがエコロジーに共通してるんだな。菜食主義者がおおいし、朝早くおきて、いつも天気のぐあいを見ているとか……。

そこでの主題は工場建設や海をどんどん売っちゃうようなやりかたに反対して、観光主体ではない自主産業をおこせということ。それがこんどは反軍運動にむすびつく。ハワイ州というのは観光収入よりも、じつは軍事基地からあがる収入のほうが、はるかにおおいんですよ。例のパール・ハーバー奇襲作戦がしめすごとく、ハワイは大平洋最大のアメリカの軍事基地でしょう。その税金によってハワイが生きているということにたいする反対がある。

そうした運動によって、ハワイ人のあいだに島の意識がつよくなり、同時に、南太平洋地域とのつながりの意識がでてきた。ハワイの地つきの人びとの祖先は、もともとタヒチからきた人たちでしょう。それで二年に一度、ハワイからタヒチへ昔どおりのカヌーでいくお祭りなんかをやっている。それからニュークリアー・フリー・パシフィック運動——非核太平洋運動ね。あれもフィジーのあと、ことしはハワイで大会をやった。

だいたいハワイの本屋にいくと、南太平洋関係の本がたくさんあるんですよ。ハワイがセンター化しているというか、東西文化セン

ターとか海洋文化センターなんかがあって、この地域に関心をもっている人は、フィジーの南太平洋大学にいくか、あとはハワイにくるようになってるんじゃないかな。

つまり五〇年代のアメリカ本土への一体化願望から、六〇年代のベトナム体験をへて、七〇年代のなかばぐらいから、「ホーム・グロウン」とか「ハワイアン・ルネッサンス」といったことばが、さかんにはやりだす。たとえば五〇年代、六〇年代には、ハワイ大学でハワイ語を勉強する学生がほとんどいなかった。ハワイ語というのはダメなことば、死語にちかくなってたんだね。それがいまは何十倍にもなって、ハワイの昔のものを勉強しはじめている。それはもちろん黒人運動をはじめとする、アメリカ本土の少数民族覚醒運動ともむすびついてるんだけどね。

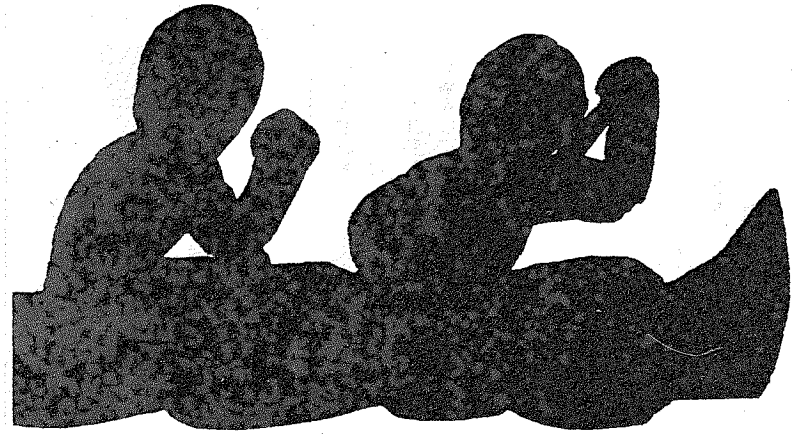
ただハワイのばあいは、民族の覚醒運動といっちゃうと、ちょっとちがうところがあって……ぼくはハワイの放送局でゼネラル・マネージャーをやっている、すごく面白い二十九歳の女性とはなしたことがある。さっきの『ホーム・グロウン』というレコードをつくった人。「ホーム・グロウン」というのは、マリファナやなんかを自分のとこでつくるという意味もあるんだけど、要するに自家製という意味だね。

ぼくのきいたかぎりでいえば、彼女は「ホーム・グロウンというのは政治的な概念だ」といっていた。その第一は軍隊や工場はでていけという主張で、これはわかりやすい。

それから人種の問題ね。というよりも混血の問題。彼女自身がポルトガル人、中国人、イギリス人、ハワイのカナカ人などの混血で、ルーツさがしをしようにも、ルーツが世界中に分散しちゃっている。だからアイデンティティのありかを、血の純粋さにもとめることはできない。そこから「いまこのハワイにある人間のかたまりが、それ自体としてのアイデンティティをもって、あたらしい文化をつくっていこう」という考え方がでてくる。つまり自家製なわけだ。「いまここに住んでいるみんな」という考え方。

一九六〇年にケネディがやってきて、演説をしたわけね、「ハワイこそアメリカの理想だ」といって。それが非常にうけた。

もともとアメリカというのは、歴史や国家や人種をすてて、宗教のちがいをのりこえて、ひとつの国をつくるという考えの上になりたっている。それがアメリカ憲法の理念だ。そ



れが本土ではだめになって、ハワイで実現されている。そういう演説をやって、死ぬちょっとまえのケネディがかなりうけたんです。いまでもハワイのトロツキストたちは、人種のルツボというのは嘘だ、ハワイでだって人種差別はつよいというビラをまいてるけど、たしかに外から見ると、ハワイは混沌としているよね。

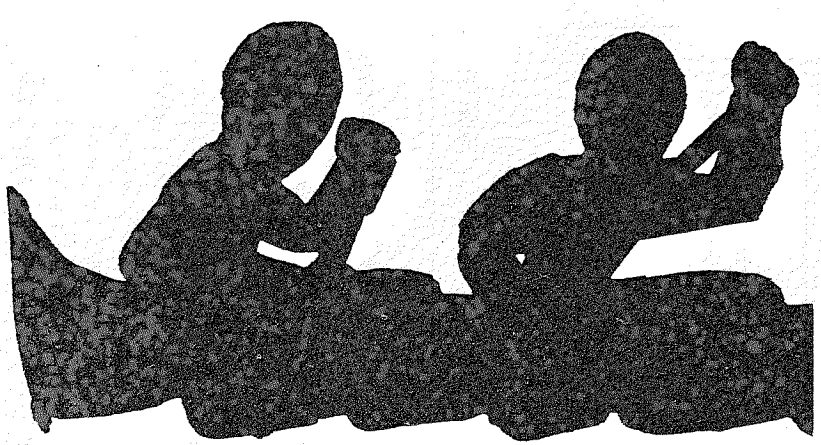
いまは日系人の三世たちなんかでも、白人とより、ほかの黄色人と結婚する連中がおおい。少数民族同士の結婚がはやってるんですよ。これも「いまここに住んでいるみんな」という考え方のあらわれだと思う。ハワイでは日系人の力はつよいでしょう、いまの州知事は日系人だし、それで一世や二世たちは心配している、三世たちの混血で日系の血がなくなるんじゃないかといって。ぼくは結構なことだと思うんだけどな。

……ともかくもこういう背景をもって、七〇年代のなかばに歌の運動がはじまった。ハワイのフォーク・ソングというのは、ハワイの自然や生活とむすびついたものとか、「がんばろう!」とかいうのがおおい。フォーク・ソングだから当然なんだけど、日本のはちがうよね。

そのきっかけになったのが『ホーム・グロウン』のレコードで、これは放送局がプロデュースしたんですよね。身体障害の人たちのための寄付金ということで、税金がただになった。ハワイには放送局がものすごくたくさんあるでしょう。そのディスク・ジョッキーでかけた音楽をあつめたんだね。みんなシロウトなんだけど、水準はかなり高いと思う。たくさんの人種の人たちがうたってる。あとでプロになった「オロマナ」というグループは、ぼくはいちばんすきなんだけど、ポルトガルの流れの人と韓国人というくみあわせなんです。

「フジムラ・ストアー」も、演奏しているのは日系人じゃない。これはノース・ショアかどこかの、いなかの日系人のなんでも屋がとりこわされて、そのあとに本土資本のスーパー・マーケットがたつ、そこに観光客が車やバスで押しかけてくる、けしからんという歌でしょう。まァ、そこまではうたってないけど、ともかくも観光や過度の開発に反対する歌です。

ハワイでは観光のためにニセの浜をつくるんだな。ワイキキがそう。運河をつくって、よそから砂をはこんできて、フィクションの



水牛通信　毎月1回10日発行　1981年10月10日発行　通巻28号　1980年5月23日第三種郵便物認可

浜をつくる。

それとおなじことで、観光事業というのはフィクションの上になりたっている。フィージーではホテルの従業員教育のために、ハワイから人をよぶんですって。ハワイのホテルではネイティヴをボーイにやとう。そのことで、白人が土人をつかう、というウソの場面をこしらえる。そのハワイの観光術をまなぶために、ハワイから先生をよんで、いかにボーイが土人のふりをするかという勉強をするのね。観光に反対するというのは、そういうフィクションをこばむということでもあるんだね。

そういうところでも、ハワイと南太平洋とのつながりがつよくなっている。二年に一度、タヒチまでカヌーでいくお祭り――その航海をうたったレコードがある。あれはハワイのグループのリーダーたちがあつまった、まァ全国座長大会みたいなものかな。ジャケットの写真を見ると、あぐらをかいて、すわって演奏しているのがおおいでしょう。どうやらいまは、ああいうスタイルが中心になってるんですね。

編集後記

今月号は発送がたいへんおくれました。印刷ができる頃、水牛楽団といっしょに編集委員会もタイにいくことになったのです。十二月号ではタイで現地編集すると調子よくでかけたものの、成果はどうなったか。この号がとどく頃にはわかっているでしょう。

十一月号は8ミリ映画「お父さんの戦争体験」が中心になります。

今月号は、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ文化会議の一部として川崎でひらかれる水牛ミュージック・コンサート第4回「コザの向うにミクロネシアが見える」をきっかけに、太平洋の島々のことを、すこしかんがえてみました。日本だって、その島々の一部なのに、目はいつもユーラシア大陸にむけられ、島には大陸とちがう文明があることも忘れがちです。

水牛楽団カセットテープは、もう売り切れています。再版はしないので、注文をいただいても、おカネをおかえしすることになります。必要なら海賊版をつくってください。

購読の御案内

＊本誌は書店にはおきません。毎号確実に入手されるためには編集部あて予約購読の申し込みをしてください。発刊と同時に直送します。

＊申し込みと送金は郵便振替（口座名水牛編集委員会、口座番号東京四―九一七九二）または現金書留でお願いします。住所、氏名、電話番号、何号からということを明記してください。

＊購読料は送料とも一年分二〇〇〇円、半年分一八〇〇円です。

水牛通信　第三巻第十号
一九八一年十月十日
定価　二〇〇円
発行人　堀田正彦
発行所　水牛編集委員会
〒154東京都世田谷区新町2―15―3
八巻方
電話〇三（四二五）九六五八
振替口座東京四―九一七九二
印刷所　㈱トライプリントショップ